

三河アララギ

2021年 令和3年10月 神無月

十月号

第六十八卷 第十号



ニューヨーク日記(180) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

STORAGE FINDS

Blue Shoe Diaries



昔々ロスに住んでいた頃があったのです。そんな頃や子供の頃の物がぎっしり詰まったストレージが今でもロスに残っているんです。せっかくならにロスに居るので10年以上振りに中身を見に行きました。そうしたらやっぱり懐かしい物がたくさん。なぜ当時取っておいたのか覚えていないけど私の昔の毎日の道具が出てきました。あー若かったな～。何だか分かりますか? 器械体操の平均台のシューズと段違い平行棒の日本語ではプロテクターって呼んでたかな? です。

We used to live in LA, a long long time ago. So there's a storage locker full of our stuff and we went to go take a peek at what's inside. I think the last time we were at the storage facility was more than 10 years ago and even then the contents were old. Here's one of those things full of nostalgia. I came across my past life! Not sure what made me keep these but kinda glad I did. This was my life, all I did until I was 17. In case you can't tell what these are, they are gymnastic beam shoes and grips for parallel bars!

目次

第六十八卷第十号(通卷八一四号)

表紙・曼珠沙華	今泉 由利(1)	鈴木美耶子(24)	森岡 陽子(33)
ニューヨーク日記(180)	Blue Shoe(2)	吉見 幸子(24)	田中 清秀(33)
アカンサスの徑	御津 磯夫(4)	牧原 正枝(25)	木村 歩歩(34)
三河アララギ歌集Ⅲ	大須賀寿恵(5)	森 厚子(25)	植村 公女(34)
歌集「續々草々」	今泉 米子(6)	山崎 俊子(25)	今泉 如雲(34)
かぜくさ	牧野 鍊子(7)	伊藤 晴江(25)	今泉 直人(35)
盆すぎて	岡本八千代(8)	三田美奈子(25)	今泉 由利(35)
鉦叩き	弓谷 久子(10)	現代学生百人一首 東洋大学	かさね吟行会
水引草	今泉 由利(12)	佐野 心人(26)	『酔いの徒然』(114)
空蟬	安藤 和代(14)	丹羽 伸一(26)	楽しい時間(107)
モンブラン	清澤 範子(15)	小鹿名奈子(26)	絹の話(131)
さわやき	伊藤 忠男(16)	米澤 朋花(26)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
物言わぬ	矢崎 直人(17)	山口 桃佳(27)	「江上浩二の独り言」
蝉の声	森岡 陽子(18)	山田美衣菜(27)	漢詩研修(六十)
木綿絹麻	白井 信昭(19)	白川 末雲(27)	『忘れてはならない日』
盆提灯	杉浦恵美子(20)	段 亮輔(27)	秋思
白鷺一羽	山口千恵子(21)	森岡 陽子(28)	微笑菩薩
今年もまた	夏目 勝弘(22)	高橋 育郎(30)	旅人芭蕉(6)
『ことよせ』	いーはとぶ	松本 周二(32)	「氷魚」のことから(249)
		山元 正規(32)	なほ遠く・太古と今と
		浜田 紀政(32)	「三河アララギ」について
		重野 善恵(33)	

アカンサスの徑

御津磯夫

枯れのこる枝にも移りしばし鳴く尾長のこゑも乏しくなりぬ

菩薩らはなほも修業をしたまひて救はむ願ひに立ちませる見ゆ

ポポーにも青き果の見ゆ並びたつ一本枯れしは春すぎてより

わがうへに過ぎ行く時間重々し老いて病みたるのちの呆けざま

雑草の花こそ愛よしといふまでに心のゆとりあるべきを言ふ

蜘蛛の巣は朝々おなじきところにある朝々ゆきて朝々忘る

ぎりぎりの呼吸の境よりよみがへる見えて来たるはみなこの世なり

立ちのぼる白き煙は夢ならず窓の下にて麻醉覚めゆく

点滴の滴々光りて落ちつづくわれのいのちの脈うつごとく

三千年を経たる蓮はちすの種子しゆし咲きて鐘鳴らす今日の散華ともなる

三河アララギ歌集Ⅲ

大須賀寿恵

幸をもたらすごとく郵便車今朝登り来る鉄平石の径

冬の陽をしばし当ててわが病める腰椎の辺より温くなる

梅雨時の湿りは雁皮紙にも及び書きゆ文字のにじみひろごる

柱にて遊びゐたりし幼児が手放しに立つ五秒ばかりを

時刻くれば棚の葉を取りいだし飲みくだすなり十八年目か

注射受くるこのひとときを安らぎてベッドの上に眼閉じをり

夕べなほ火照り残れる鉄平石の小径を歩みてくだりゆきたり

六十の手習ひはじめの臨書して赤き丸今日はひとつ貰ひぬ

やうやくに書きし履歴書をポストに入れぬ差入口の雨を拭ひて

黒海のふかきところに筆の穂の馴染みてきたるまでの時の間

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

たちまちに亡きをききたり六月の夜の雨暗く冷えて降りつつ

灰ほのぼのと淡き紅咲きつづきなよなよしきを琉球月見草といふ

芭蕉葉をぬきて立ちたる今年竹青のするどし天にむかひて

包丁の當りたのしき幾年か信光寺公孫樹いちじょうの巨き俎

一鉢に月下美人の乱れたち今夜の花のかぞへがたしも

さやさやに白き百日紅の花高し聞きてのみ知る祖父おぢのこと

浴衣の袖を筒袖にせむと剪りとりぬ着る物はいよよ軽きがよろし

幾年も開かぬ藏の破風より伸び出てひららの青き笹の葉

海の色見るのみにして鰻るを知る人ありきはるけくなりぬ

白萩につづき紅の咲きはじむ未だうねらずわが窓の萩

かぜくさ

山本佐登

感覚のなくなる程に手は凍り渚に入りて青海苔を採る

土間の隅にあさりが時折鳴いて居り寒明けの雨降りいづる夕べ

異常なきを確かめつつ校舎開けゆく風速計は動かず居りぬ

大津島の渚にまれに残りゐる松葉を今宵ごまあへにする

遠足に児童等発ち行きし校庭にひとりとなりて紙屑を拾ふ

鍵穴もわからぬ程に夕暮れし校舎めぐりて戸締りをする

校舎裏の雨にぬれゐる萑を摘み一人の朝の雑炊をたく

九十九折りに裾野を降るわがバスの窓に触るるは萩富士あざみ

四十五年わが生きて来てここに住む雨だれ水の海に向きて流れゆく

梅田川の昏き水面に航跡の残りて寒の潮はたゆたふ

盆すぎて

蒲郡 岡本八千代

盆すぎて灯のなきちようちんゆらりゆうらりあたかも涼しげにゆれてゐるかな
盆すぎて光忠寺と林光寺の盆礼をすませてわれの心の安らぎ

今日もまたお礼をせねばならぬ人に逢ひて帰りぬわれの安らぎ

われにある倅はせとは何ぞやな老いの独りの活くらしかもね

甘くなきコーヒーのみつつまた思ふわがまま老いの独り暮しを

少からこし辛からき丸ろきセンベイ一枚を手折りつつ食べるもの惟おもひつつ

居場所より高校野球がよく見ゆる時々見つつ本を読みつつ

コロナ禍のはげしくなりつつ日は暮れて明日といふ日のわれに来るかしら

二度のワクチン注射われに了はり久々にもつ安堵の心

だんだんと夫との別れの年月のすぎてゆくかな悲しみ淡淡

顔肌はたに叩たたきつけてつける化粧品はつぷのオークル10をまた買ひにけり

豊明より車にて町子今日来たり久々に巡めぐる岬の道みの辺

時々ときに車を止めて海の色海の光を話し合ひつつ

地図に見る西浦岬はどの地図も一点の如き小さき白色

しばらくはコロナ禍のこと忘れゐて互ひの思ひの通ひ合ひつつ

鉦叩き

豊川 弓谷 久子

空しさと安心感あり無観客の東京オリンピッククテレビにて見る

十三歳の金メダリストの笑顔がうつる拍手送らむテレビの前より

何時の日か語り草とならむコロナ禍を猛暑の中のこのオリンピック

サイレンに合せて暫し目を閉じるあの大空襲にて逝きし友等よ

あの日より七十六年消す事の出来ぬ記憶よあの大空襲

白菊を子は買ひて来ぬ今年又子等に任せむ盆墓参り

暫くは雨が続くと予報あり涼しく盆は過ぎゆきぬ

この暑さ並々ならずと書かれをり去年の日記の八月十五日

道路浸水は小坂井あたりか大雨の注意報続く昨日も今日も

一瞬の出来事なりき真昼間の如き明るさと大音響と

停電となりてひたすら夜明け待つ身近な落雷我が初体験

電柱の修理の終るまで小半日電気の便利さ思いてゐたり

十八日ぶりの真夏日涼しさに馴れし体に辛き暑さよ

ゆったりとぬるき湯ぶねに浸りたり窓の下にて鉦叩き鳴く

奥山より法師蝉の声聞え来る残暑きびしく葉月も終る

水引草

東京 今泉 由利

タデ科イヌタデ属の水引草花軸高しおじい様おばあ様に会ひたい

隋よりの小野妹子の帰国時の天皇への贈り物に紅白の紐掛けありと

水引の結び方を教はりし日よ花軸高し今日水引草

封印の証であると水引の水引草の花軸高し

彫りつづく桧正目の聖観音像どんどんスリムになりてゆかれる

性別といふを超へられ聖観音像彫りつつ加ふ自を

父母の庭と同じき草々よ軽井沢にて出逢ふ出会へる

父と見き母と見たりき草々よ父とゐるごと母とゐるごと

雑木林一本根方の小枝に届く今日の最後の太陽光

一番目の萩の紅紫に逢ひてより尾花葛撫子女郎花藤袴桔梗

無限とも埋め尽しをり木々の葉よ静かに静かに息をしてゐる

未完成聖観音像にもお見せする無限とも木々の葉っぱの安らぎ

さやさやと雑木林を埋め尽くす一葉一葉のテレパシー受く

ゆっくりとゆっくりと細胞の活性の音聞こえつつゐる

木耳とアスパラガスのソテイにて二週間の日日よろしい

空 蝉

豊川 安藤 和代

梅雨明けの山鳩の声リズムよしこの青空は広がりてゆく

散歩道四ツ葉のクローバー見つけたり心うきうき友に電話す

西日さす窓に簾すだれと風鈴をかけてひと日の予定は終る

保育士を辞して二十年幼等と遊びし夢に今朝も目覚むる

酷暑にも負けず木槿は次つぎと白さ保ちて咲きつぎていく

ファッションショーの女ひとの歩調にどこか似て白鷺が今浅き川ゆく

ギラギラの大原人も風もなく里芋の葉も疲れ見えおり

ブロック塀にしかととまりし空蝉を下校の児等のまあるく囲む

金メダル笑顔と「やまゆり園」の記事並びて吾れの心乱るる

吾れ作る料理の名をば孫問えど名などは無しよ「バアチャンチャンプル」

母亡くも素直に育ちし孫うれし孫はこの秋嫁を迎うる

モンブラン

春日井 清澤 範子

六年も土の中にて命かぎり鳴き果つるのか蟬一つ転がる

低気圧の風の向きなり今の夜は電車の軋む音近くに聞こゆ

七月四日亡き夫の誕生日遺影に供うは好きなモンブラン

娘運転の車にてそつとケーキを膝に持ち娘と歌うハッピーバースデーの歌

携帯の夫のメール多くして読み返しては夫の愛想う

残された私も娘も二人して頑張り生きますコロナの中を

世の中は次から次へと目まぐるし今日は庭の剪定終る

父さん子で育ちし娘は毎日の様に遺影に向い涙を流す

四十九日の法要はとどこうりなく終り住職は母さんを大事にしてと一言

四十九日の法要に吾は娘に手を引かれつつ焼香をする

わつやき

大阪 伊藤忠男

あの峠目指して歩むこの道も日暮れになるか茜に染まる
風に乗り夕焼け小焼け歌う声聞こえ気が急ぐ里の夕暮れ

青き苔みずみずしきや西の庭小川のほとりに広がっている

檜の木の茶色葉揺れて垂れ下がる寂し姿に我が励ます

酒を避け二十年過ぎるこの年で今は忘るるほろ酔いの味

西空に向かい手を振る力込め青きそこには飛行機雲が

名も知らぬ野に咲く花のささやきに思わぬ勇氣もらうものなり

蝉の声消えてコオロギ窓の外涼しき風の吹き抜ける宵

流れ着く先はよどみか大海か両手でそつと笹舟流す

減塩と甘さ控える食事とて体のためと箸を運ぶや

山鳩の古巢に戻る心地かな濡れ縁座りお茶のひと時

物言わぬ

東京 矢崎直人

九十二歳三年前から語ることやっと出来たと被爆の痛み

二十四年被爆百年迎えたら被爆者はもう直に語らず

「日本の一番長い日」敗戦忌コロナ禍雨の七十六年

物言わぬ仰向けの蟬降り注ぐ残りの蟬の声の絶えずに

降る量の想定の幅軽々と越えて線状降水帯の

雨の量計り知れないどれくらい赤いグラフの特別警報

日々増ゆる新型コロナ感染者万を越えても驚きもせず

厚き雲急に涼しくなりにけり残りの蟬の雨の間に間に

道端の隅に一輪また一輪タマスダレ咲く凜とした花

夏の雲秋の雲とが行き合いて空の青より濃きスカイツリー

蝉の声

東京 森岡陽子

秋気配みんな蝉に混じり鳴くつくつく法師の鳴き声涼しき

初蝉も聞きし神社の秋の蝉明日も聞くかあの蝉の声

七夕の涼感誘う笹の音園児の短冊パパとママの顔

道端に溢れ出づるは日々の草花満ち満ちて門閉ぢられずに

木瓜の実は何を待つのか青々とたわわに実るも突く鳥来ず

溪谷のせせらぎの音蝉の声微かに聞ゆ野鳥の鳴き声

溪谷のいたる所に水が湧き苔むし青くローム層滴る

かぶき門くぐり行く道回遊の日差す庭には古木の実石榴

紅色の木槿花咲くでこぼこの川へと続く道の石地蔵

秋の声聞へ来る夜はしみじみと色なき風の音すだく虫の音

木綿絹麻

豊川 白井 信昭

つば広の帽子かぶりて作業せむ炎天の下に熱中症予防

東の隅にヤマブキ植え替えて何年ぶりか今年の開花ひんがし

朝事とマツトほす妻を手伝はむ太陽すでに高きにありて

日の光さ庭門口に降り注ぐジャスマンの花びやくしきびやこう白色白光

店のなか手織機一台位置占めて兄嫁織りし木綿絹麻

傍に兄嫁見せる見本三つわが手に触りその違い知る

曇天のひときわ高くラゲーナの大観覧車孫と初乗り

岸壁に天を仰ぎ待つわが三人遊覧船のミニクルージング

平日の客の少ない船の上にわが孫と妻と暑さをしのぐ

群なして突堤に並ぶカモメらをわが眺めつつ港いでゆく

盆提灯

蒲郡 杉浦恵美子

盆提灯出せど終日土砂降りは年中行事に水を差さるる

唯一の生き証人となる叔母卒寿我が誕生に立ち合ひし人

我が祖母のほほえみことの命名を遠い眼をして叔母は語りぬ

叔母卒寿小さくなりしその肩をそつと摩りぬ血筋愛ほし

母と叔母仲良かりし故叔母にとり我に格別想ひあるらし

母と叔母日記の習慣相似たりこれも血筋かと微笑まし

コロナ禍に地蔵の大祭中止なり接待団子を配りて終る

サツカーのユニフォーム姿の少年等地蔵参りに来てくれました

接待の地蔵団子を配り終へ村の地蔵盆閑かに過ぎぬ

会食が儘ならぬこと普通じゃないぽつり黙食美味しい訳ない

炎天の日差しに知らぬ間秋の色長雨のうち立秋過ぎぬ

白鷺一羽

豊川 山口千恵子

君子蘭葉は姿よく伸びたるが花は咲かざりこの二年ほど

ちらし寿司つくりて娘の届けくれし昼餉に急ぎまにあはせしと

ひつそりと青田の中に佇める白鷺一羽動くともなし

佇める青田の中の白鷺の動かぬ姿白極まりぬ

漬けし梅ザルにひろげて日に干しぬ土用干しは三日間ほど

紅の色まだらになりて干し上がる三キロほどの今年の梅干し

朝より降りぬし雨の午後上がる三日ぶりなりスーパーへ急ぐ

庭に咲く百合も加へて供へたり雨間に来たりてわが家の墓に

訪ひ来し息子一家の帰りたり残りしわれら常の暮しに

掃除機より使ひやすしと思ひつつ階段をはく箒にてはく

今年もまた

豊川 夏 目 勝 弘

災害のテレビ見たび縄文より災害のなき地に住みゐる幸せ

一万年つづきし縄文の人びとの知識ならず智慧の尊し

川に海に山に近きに住みつくは得るもの多し災害もある

知識のみ多く身につく現代人指先のみにて何でも知れる

ものなべて使ひ手の責任それのみで安易さ便利さが災^{わざわい}を起す

いついつまで続くや大雨窓ごしに桶をあふるる雨水を見つむ

上空には大気の流れの川があり地上の川は濁流あるる

大雨の情報のみのテレビ消したただ条なす雨を無心に見つむ

集落の広場に集まり雨乞の輪をなすなかに暗き思ひ出

作りしは雨乞小町にあらざるや歌ひ跳る大人たちのなか

気象庁は大雨情報知らすのみ大雨消滅の祈祷はやらす

庭なかにうるさきまでに鳴きてるし雨乞虫をこのごろ聞かず

手間はぶくことのみに使ふ科学かな生き物の種の減りゆく時代

通るたび草を引きぬし老人の畑は丈なすアメリカセンダンソウ

休耕地できればたちまち無機物の太陽光の発電パネル

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

この夏は丈すら孫らに抜かれそう嬉しくもあり悔しくもあり
懐しき笑顔も半分マスクの下団塊われらもワクチン接種よ

水野絹子

短冊に孫六人の願ひ込めわれの育てしスイカを供ふ
笹こより手に入らぬ物多くなり七夕一式娘に届けり

牧原規恵

もう出来ぬ畑仕事も針ごと母の生活狭くなりつつ
午睡より目覚めて遠きセミの声だんだん大きく聞こえるかな

稲吉友江

おぼおぼと雲の間の虹薄きかた今日も良きことのアレかしと思ふ
孫らにとかつて励めし Pasta 作りけふはひと味何かが足りぬよ

鈴木美耶子

取れたての夏野菜一杯持ち帰り我に差し出す夫の誇らしげ
分けあひて私の庭の半夏生その花詞「内に秘めたる情熱」と

吉見幸子

梅雨明けかつぎつぎ開くヒマハリよめざめて花は誰か待つらむ
出来たての料理は何も並ばぬに何かあるかと冷蔵庫をあける

牧原正枝

幾度も三十度超えに二十度にもなりつつ過ぎゆく今年の水無月
けふよりの短歌ノートは抹茶鈍色煌めきかすかに妖しき光

森厚子

土しめり草ひきやすくひたすらにうつむきつづく朝の陽のした
いつまでも降りやまぬ雨にこもりゐて窓より見てをり半夏生の花

山崎俊子

仕事への自覚と覚悟と言ひし彼のことば思ひつつ歩きゐるわれ
歩きゆくアスファルトの道の隙間待宵草まつよぐさのうす黄色の花

伊藤晴江

わが居間の上敷替へしこの夕べ藺草のかをりかすかただよふ
梅雨さなか三河の海は靄の下伊良湖の岬は浮島のごと

三田美奈子

現代学生百人一首

東洋大学

ふれる度互いの汗ですべる腕チームを背負いレイアップ行く

静岡県立静岡中央高等学校二年

佐野心人

2年間いつも2人で乗り越えたマッチポイント最後のスマッシュ

愛知県立春日井西高等学校三年

丹羽伸一

母の日に感謝の花束照れ隠し素直なこころ花束の中

西尾市立平坂中学校二年（愛知県）

小鹿名奈子

電車での私のひそかな楽しみは低音が響く車掌さんの声

光が丘女子高等学校一年（愛知県）

米澤朋花

電話出て奥様ですかとよく聞かれ成長するたび母に似てくる

立命館守山高等学校三年（滋賀県）

田口桃佳

夏の朝駆け込み乗車息切らし君を見つけて前髪直す

立命館守山高等学校三年（滋賀県）

山田美衣菜

「あ、今のミ」風鈴が鳴りつぶやくと「風流ないね吹奏楽部」

長岡京市立長岡第四中学校二年（京都府）

白川末雲

帰り道あなたと乗った阪急線レールと鼓動がビートをきざむ

花園高等学校一年（京都府）

段亮輔

贈呈誌

森岡陽子

冬雷 2021年 9月号

○うばたまの夜の小川のせせらぎに交じりてきこゆ河鹿鳴くこゑ

天野克彦

○暮れなづむ駅前通りをゆつくりと聖火掲げて婿走りをり

有泉泰子

○土色に染まらず赤錆びた柄のなきポンプぼつねんとある遠野市郊外

関口正道

○中川を吹き来る風にカレーの香ときをり届く夕暮れ近し

大塚亮子

○直ぐに生くる意志もつごとく茎の上に未だ青める萘の苔の

穂積千代

○椿しろく枝一株に咲く下に古き祠のある分れ道

稲田正康

○瀬の音の聞こえぬ川面しづもりて田に水入るる六月となる

古嶋せい子

○苔むせる時頼公の墓どころ遥かな時代の風を伝へて

桜井美保子

○溝蓋の格子の隙より顔を出す露草の青ふまれてありぬ

内垣米子

○畦道に届かぬ蓮は膝までを沼に浸かりて五本摘みたり

藤田夏見

月虹 140号 2021年 6月

○どれほどの力ふるひしや地を割りてたつなみ草のやはらかく咲く

小林 勝

○歓声を養分として球技場の泡型の屋根ふくらむ心地す

井村 喬泉

○昼となり太陽射せば雪路のびちよびちよとなり蒿靴困りき

駒ヶ嶺 泰秀

○蝶が舞ふ花野に迷ふ昼下がりだあれもゐない見沼田んぼは

清水 和子

○鳶尾も菖蒲も咲かせ紫陽花と時を速むる地球の温暖

成島 哲子

青春の詩 その3

高橋育郎

別れの友と、日比谷公園の池の面を見つめながら

シヨパンの「別れの曲」に載せて

黄昏行く 夏の陽

青葉の香 漂う園に

君と共に 喜びの語らい

希望が溢れ 胸ときめきぬ

池の面みつめつつ

語りしその声 どこへか駆けゆき

はかなき あの日よ

とわにぞ忘れずや 若き日の夢

青春は燃える

青春は燃える

熱くはないのか

熱さなんか 気にしない

燃えるにまかせて

それが青春だ

かしの實

かしの実 かしの実 そら落ちた

雨降るように パラパラと

風に吹かれて 落ちてきた

かしの実 かしの実 まだ落ちる

うらの山には 鈴なりの

鈴をふるよに 落ちてきた

山から木枯らし 吹いてきた

かしの木山に 冬が来た

かしの木山に 雪が降る

『俳句』

僧侶より説教多き生御魂

松本周二

朝曇散歩の帽子忘れきし

ノクターン聴きつつ寝ぬる月夜かな

二階部屋空けて子等待つ盆休み

山元正規

夕あかね蜻蛉の空となりにけり

島の子ははや真つ黒に盆休み

飛行機雲暫く見ない秋湿

浜田紀政

出航や汽笛の三度秋の雨

切通武士達受くる秋の風

渡り行き川の向ふの裏盆会

重野善恵

もろこしを焼きやき決める風呂の順

鬼灯の熟れて軒端に吊す暮れ

渡り行き川の向ふの裏盆会

森岡陽子

もろこしを焼きやき決める風呂の順

鬼灯の熟れて軒端に吊す暮れ

天水に温き残るや盃蘭盆会

田中清秀

秋めくや胸突き坂の長き影

天高く秋津数える時の鐘

散歩道草刈りを待つ残暑かな

木村歩歩

隣り合う蝉の死骸と抜け殻と

アスファルトここに生きるかすまひ草

蝸ひぐらしや線香の束燃え尽きて

夏帽子神社の前のレストラン

植村公女

退場の選手の背中大西日

朝顔の開ききらずや日の暮れる

オノヨーコゆかりの鐘や青りんご

今泉如雲

八月の草間彌生のきのこかな

千年の秘仏に供へ大西瓜

ナガサキ忌九十二歳鐘の声

矢崎直人

延長の手書き貼り紙残暑かな

鶏頭花雨に打たれてより赤く

如意岳の篝火にして大文字

今泉由利

赤赤と花軸立つる水引草

どんぐりの発育途上ブナ科ブナ

生け垣の赤き一位の実を摘み

透明な傘を濡らして霧霰

かさね吟行会

「吟行会が中止になったので⑧」 8月

田中清秀

今回の取りやめは、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言だけでなく、真夏の暑さによる熱中症の予防と合わせてお盆行事で都合が悪い人があったことによる。高齢者のメンバーが多い中、健康第一とする判断はやむを得ないだろう。

全国の新型コロナウイルス感染の拡大は未だ終息の兆しが見えず、政府の発表する対策も不要不急の外出自粛、三密の回避や手洗いとマスク着用の徹底の繰り返し、その中で最も有効な対策はワクチン接種と言われている。早く多くの人にワクチン接種が進み集団免疫が広がることを願うのみである。

以下は暇人の独白である。

「七月十九日、イギリスのジョンソン首相はワクチンの高い接種率を背景に、イングランドでの新型コロナウイルスに関するほぼすべての規制を撤廃すると発表した。これは、規制をなくして国内経済をパンデミック以前の

状況に戻すことを目指す方針だと言う。一方ではギャンブル的な判断だと酷評する意見もあるようだ。しかし、イングランドのワクチン接種率は十八歳以上で七十パーセントとなっており、実際一日当たりの死亡者数は千人を超えていた一月頃より大幅に減少して、重症化も一定程度押さえられている。ただ、感染者の実数を見ると七月二十六日には二万五千人近くに上り、減少傾向にあるとは言えかなりの数である。その後の状況は感染力の極めて強いデルタ株が世界中に急激に拡散しており先行きが懸念されている。イギリスの歴史的な自由主義は、いかなる人間も自ら自由な思想と行動が選択できるとされており、今回のジョンソン首相の判断はこの考え方からすると一見識と言える。

イギリスのこの選択は、今後の歴史が判断することになるだろう。我が国でもワクチン接種率が国民の七十パーセントを超えて、そして集団免疫がある程度達成された時には同じような決断をするのだろうか。」

「東京二〇二〇オリンピックは金メダル二十七個を含む合計五十八個の多くメダルを獲得して成功裏に閉幕した。開催に至るまで紆余曲折があったが、選手達の素晴らしい活躍には多くの国民が感動したに違いない。

続いてパラリンピックが開催されている、その開会式は海外記者からも感動の声が寄せられ、日本人のおもてなしの精神は高く評価された。その後、連日テレビで多くのパラアスリートの競技が放映されている。義足で走る陸上選手、板羽義足を上手に使う幅跳びや目の不自由な選手の長距離走、さらに両手両足のない選手や知的障がい者の水泳競技、車いすのラグビーやバスケットボールなど多くの種目が行われている。そこには必ず選手達の輝くような笑顔と涙、そして支えてくれた多くの人びとへの感謝の言葉があった。無観客の開催で、現場に行つて競技を目の当たりで見ることが出来なかつたのは残念だった。

テレビ観戦でも、選手たちの活躍から不屈の精神に対する尊敬が自ずと湧いてくる。「レジリエンス」と言う、何度でも立ち上がり不運を跳ね返すしなやかな強さを表す言葉が一番似合う。健常者の想像を絶する努力と忍耐の積み重ね、一見ただけでは分からない感動のドラマが笑顔の裏にはきつとあるはずだ。

支えや助けが必要と思われている障がいのあるアスリートから、我々は逆に多くの勇気をもたらした。そして生きることの意義や人間の尊厳を改めて考えさせられた。」



心・肉体・魂を表す「スリーアギトス(私は動く)」と呼ばれるパラリンピックのシンボルマーク

『酔いの徒然』(二一四) 丸山 酔宵子

『御代田にて』

無謀なる饗宴と言わねばなるまい「TOKYO 2020」が終了した後日本列島を襲ったのは驚愕の豪雨とデルタ株の脅威である。全国で2万人越えの新規感染者と医療崩壊そしてゲースー菅首相による緊急事態宣言の地方への拡大と延長が発表された。

お盆も終わり、まだ豪雨の余韻が残った昼下がり、一路関越道を信州御代田に向かった。25年前、縁があつて浅間山の麓の御代田にログハウスを建て都会の喧騒を逃れて、気が向けばいつもぶらっつーと一人でもやってくる。軽井沢から小諸、長野に通ずる北国街道沿いにあり、「風立ちぬ」の堀辰雄の追分の隣に位置する。浅間山の裾野が優美ななだらかな稜線を描き、セザンヌのエクス・プロヴァンスにあるサント・ヴィクトワールを彷彿させる。軽井沢は矢張り軽井沢で、お洒落で憧れの町で夏場の生活には快適かもしれないが、地理的には非常に湿気が多い土地で、晴れ間も少なく通年を通してジメジメして

いる。しかし、数キロしか離れていない御代田は日本一晴天の多い標高1000メートルの高原である。白菜やキャベツの高原野菜が豊富で、レタスのうまさも絶品。人口約1万5千人の町で、ミネベア本社やシチズンなどが主要産業で、名曲「ノベンバーステップ」などで有名な作曲家武満徹も安らぎのひと時をここで過ごしていた。また、「御代田」という字の由来を考察すれば、やはり古き皇室との繋がりを推察できるが、確かに「止ん事無い(やんごとない)」皇族の馬の牧場があつたようだ。夏は爽やかな風がログハウスを吹き抜け、ベランダではパラソルを立てて、読書と転寝(うたたね)。冬は冬で、外は零下で小雪が舞う日でも、暖炉で薪を燃やし、温まった室内ではTシャツ一枚で快適な暖炉の火をながめながらオンザロックである。ログハウスというのは不思議で、木の持つ素晴らしい特性を生かし、一度温まるとその温かさ体に優しく包み込んでくれる。それは、薪で炊いたお風呂の優しい温もりとか、土鍋で炊いたお米の美味しさに通ずるものかもしれない。

御代田の名を一躍日本中に知らしめたのは2002年7月に行われた「信州御代田龍神祭り」の珍事である。その当時、人気歌手であつた島谷ひとみによるリバイバ

ル曲「亜麻色の髪の乙女」が大ヒットしていた。そのオリジナルを歌っていたビレッジ・シンガーズのリーダーである清水道夫を名乗り、祭りのカラオケ大会の審査委員長に成りすまして、謝礼15万円をまんまとだまし取ったという詐欺事件である。

清水道夫とは姿かたちは全然似ていなかったのであるが、1000人ほどの町民の前で堂々と歌い上げ、歌唱力は本人を凌ぐほどであったそうだ。その後、地元に住む清水道夫の友人が佐久警察署に通告し事実が発覚したのである。

ことほど左様に、御代田は本当にのんびりした静かな田舎なのである。しかしここにもコロナは侵入してきて、町内地区放送では定時になると、安手のハレーション寸前のスピーカーを通して「ピーンポーン・・、こちら御代田町役場広報です。新型コロナウイルスが蔓延してまいります。三密を避け、不要不急の外出は避け、マスク着用を心がけてください・・。」春夏の大型連休のころには、「・・・友人知人に、連休中は御代田に來ないようにお伝えください・・。」とまでアナウンスするのである。堂々と東京ナンバーの車を駐車することもままならぬ・・・肩の狭い思いが募るのであります・・・。

お盆の季節も過ぎたが、未だ夏の太陽がここ御代田にも降り注いでいる。眩しく青空に広がる浅間山の麓には、青々と豊かに実った稲穂が揺れ、あぜ道の大きなひまわりが真夏の太陽に向かって自己主張している。青く澄み切った空に映える浅間山には入道雲がもくもくと伸び立っている。

雲の峰浅間のけむり取り込んで

酔宵子

楽しい時間 107 山本紀久雄

2021年8月31日

九代目市川團十郎・・・其の十三

歌舞伎の海外公演の歴史は、昭和3年（1928）年のソ連（現ロシア）公演にさかのぼり、以来平成29年（2017）8月現在、歌舞伎が訪れた国・都市は、36ヶ国110都市を数えるに至っている。（参照「歌舞伎を世界に」松竹株式会社）

このように海外で多くの公演をしている上に、無形文化遺産になったこともあるし、外国人が多く歌舞伎座で観劇しているだろうと、歌舞伎座に問合せしてみると、「株イヤホンガイドに聞いてください」ということで、同社にお聞きすると、実際に歌舞伎座で観劇する客は、新型コロナウイルス禍以前で全客数の2〜3%ではないかという。

ただし、これは好きな幕だけを気軽に鑑賞できる「一幕見席」を除いてのこと。歌舞伎座4階の幕見席は全てが自由席で、通常公演では椅子席約90名、立見約60名、合わせて約150名の定員となっているので、団体客を含め客は多く、ここには結構外国人が来ているのではないかと多い。

株イヤホンガイドがパリ公演時の状況を同社のホームページで公開している。それを引用すると《歌舞伎のパリ公演で、フランス語のイヤホンが登場したとき、初日は一般のお客様で借りた人が一割くらい。翌日の新聞で評論家がそろって好評の記事をのせ、その日のイヤホン貸し出しは六割にはねあがった》と写真付きで掲載している。

いずれ、このパリ公演時の状況が歌舞伎座でも現実化するのではないかと期待したい。その根拠の一つとして、前号及び前々号で紹介

介した『英文資料から読む西洋人の見た九代目市川團十郎』（宮智麻里著 佛教大学大学院紀要第46号2018年3月）が、九代目の演技について次のように述べているからである。

- ① 英国のダグラス・スレイデン（Douglas S. Sladen）は、著書『The Jap at Home』（1862刊）の中で、あるアメリカ人の発言として「彼は團十郎のしかめ面やしぐさから芝居のすべての言葉を理解できたと言った」と紹介している。

- ② 駐日ベルギー公使のアルベルト・ダネタン男爵夫人は、日本滞在日記『Fourteen Years of Diplomatic Life in Japan』（1912刊）の中で、1894年（明治27）6月18日に『忠臣蔵』を観て、團十郎の演技は堂々としており、「表情がすばらしく、ほとんど英訳に目を向ける必要がなかった」と記している。

- ③ ウォルター・デル・ノールは著書『Around the World through Japan』（1903刊）で「彼の名声は当然であり、芝居の筋を理解したり、楽しむのに日本語がわかる必要はない」と書いている。

等と評されているが、これは「九代目に代表される歌舞伎が言葉の壁」を超えたという実態を意味しているのではないだろうか。

ところで九代目は、いかにこのような高い評価を受けるようになったのか。これを検討するために九代目の生い立ちから見ていきたい。九代目は、歌舞伎十八番の創始者として名高い、七代目團十郎



の妾腹の子として天保9年（1838）に生まれた。

生まれて7日目に、河原崎座の座元、六代目河原崎権之助の養子となり河原崎長十郎と名乗った。三十間堀（中央区の中央通りと昭和通りの間を流れていた）にあった河原崎家では、代々その座元すなわち大夫元の名を権之助といい、若太夫を長十郎と称していた。

養父の六代目権之助は26歳の独身、母つねと二人暮らしであった。にもかかわらず、長十郎を養子に迎えたのは、河原崎座の座元として、「江戸随市川」といわれた名門役者との縁故をより強く結びたいという思いによると言われている。だが、実父七代目は、義理堅い六代目権之助の人柄を見込んでのことであったという。

さて、六代目権之助は、七代目団十郎の期待を裏切ることなく、長十郎（後の九代目団十郎）をひとかどの役者にしようとして幼少期から徹底的に養育し、「遊ぶ間」さえ与えないほど厳しい稽古の日々を課していった。

《朝の六時頃から稽古を始めて、夕の何でも、五時六時でなけりや自分の身体にならないんです。その間に稽古する事が、今日の学校や何かへ行くやうなものではない。何里あつてもボクボクと歩いていく。而して、行く先は、踊、三味線、義太夫、絵画、漢学、その間に又茶とか花とか然う言つた処へも行く。それが又今日の人達のやうに一週に二度や二度といふのではないのです。日曜の休みはなし、毎日です。それを終つて帰つてくると、例の養父の河原崎権之助さん、是が又中々喧しい方で何事も出来る方でしたから、それをずっと復習させる。それで、晩の御飯を食べて、始めて自分の身体になる。それが為に、仲間の方にも、近所にも友達といふものがなかつた。遊ぶ事が出来ず、又遊ぶ間がなかつたのです》

（参照「明治歌舞伎の成立と展開」漆原その子著 慶友社）

少年長十郎は、踊、三味線、義太夫、鼓、笛といった役者として必須の要素ばかりを稽古事として課せられていたのではない。絵

画、漢学、茶、花の修養にまで及んでいる。その上、稽古事に通うさいには、他の年若い役者たちがきらびやかな格好をしていたのに対して、団十郎は黒の羽織に黄八丈の小袖を着け、浅黄の襦袢を肌につけるといった質素な若旦那風の身なりをさせられていた。

こうした身なりは役者の座元の子供らしからぬものであつたため、他の同年代の役者衆から「お茶壺」と仇名の陰口をたたかれ、のちに歌舞伎界で双壁をなす五代尾上菊五郎などからよく仲間はずれにされたという。

「お茶壺」というのは宇治探茶使、俗に御茶壺道中といい、京都府宇治市の名産品である宇治茶を徳川将軍家に献上するため茶壺を運ぶ行列の護衛役人のこと。宇治探茶使は慶長18年（1613）に始まり、徳川家光



の時代の寛永9年（1632）に制度化したれ、寛永10年から幕末の慶応2年（1866）まで続けた。（写真は中山道奈良井宿のお茶壺道中行列2008年）この護衛役人、役目柄か人を近づけぬ固苦しさで、江戸の民はこれを「お茶壺」と呼び、敬遠して、ここから出た仇名で、「芸でも遊びでも固苦しく融通のきかぬ男」というのが、長十郎に対する仲間内の見方だった。しかしながら、「遊ぶ間」さえないほどの厳しい稽古を積んでいたにもかかわらず、大器の片鱗をうかがわせるものではなく、客から「大根と罵られ、下手と嘲り笑われ」るほど、稚拙なものとして受けとめられていた。次号へ続く。

絹の話 (131)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

繭の塩漬け

今日世界で量産されている大部分の繭は家蚕と云われる家畜化された蚕が作るものです。この繭は蛹が繭の中にいるのは10日前後で、その後蛹はニカワ質で固められた繭層の一部を溶かして（コクナーゼ）脱出（食い破る訳ではありません）し、成虫（蛾）になって交尾します。この繭は穴開き繭と言われ、1本の長い生糸は揚げられず、屑繭になつてしまいます。大量に養蚕しても生糸を揚げるにはあまりにも時間が短いので、古来より人々は色々な事を考えました。

生練り

この特徴は高温をかけないで糸を揚げるので、蚕が8の字を書く様に吐糸する癖が生糸に残り、白い椿の花の様に柔らかく、ふっくらした嵩高かむかかとなり、艶やかで温かく、着崩れしにくく、帯などの締めまり具合もよく、着る人を魅了してやみません。

この方法は古代から現代まで続けられ、伊勢神宮や皇

室の御料糸としても作り続けられています。

生繭は糸を揚げる日数が短いので、冷蔵保存（5℃〜6℃で1年限度）などの方法も考案されています。

生練りに使う水は四国山系の石灰質の水が良いといわれ、「伊予生糸（平安時代初期の続日本書紀に記載）」として愛媛県などが産地です。しかし生練糸は精錬が難しく、織度ムラが多く、伸縮性も不均一な為、織るものなかなか難しいようです。

現代の養蚕では温度管理をして、蚕の吐糸時の首振り振幅を一定にした織度偏差の少ない繭が一般的で、昔の様な織度偏差の大きな繭は品質のバラツキが生じ、生産効率を下げるので、行儀の良い繭が一般的になりました。染色すると織度偏差の少ない糸は表面をペンキで塗った様に均一に染まるのに比べ、織度偏差の大きな糸はその不均一が染色に深みを出し、特に波長の長い赤みを帯びた篝火かきりびの下では、幽玄な艶やかさが感じられ、能衣装などにも使われます。

よく百貨店などで昔の絹は良かった、と言われますが、今と昔では絹糸の織度（糸の太さ）と織度偏差の違の違いが大きいので感触も違い、光の波長が短くなってきた照明の変遷（行灯、ロウソクの時代からフィラメント電球、蛍光灯、LEDランプ）で見え方も違ってきたのです。

南インド（カルナータカ州、タミルナード州）では年

間桑の葉が収穫できるので、通年(年間350日)生繭(多化性)が市場に出荷され、それを製糸業者がその日のうちに生繰りの糸を揚げています。

南インドの絹は艶があり、カンチプラムのサリーなどは品の良さで世界的に有名です。

ある時、私は冬のインドのデリーでこのサリーをなびかせて歩いている妙齡な婦人とすれ違った時、その神々しい美しさにしばし見とれました。

乾繭

保存した繭を必要に応じて効率よく使う方法として、繭を乾燥させて中の蛹を殺して保存する方法が一般的で、現在の繭の殆どはこの方式です。

古い時代には天日乾燥などがありました。現在の多くは氣熱式で他にも熱風式、低温風力式、真空乾燥、赤外線乾燥などがあります。保存期間はいずれも1年間位が良いと言われています。

塩蔵

古代中国で行われていた繭の保存方法で、今日の日本でも、僅かに特殊な物を作るのに使われています。

生繭に塩をまぶし重ね(生繭2kgに塩350g)1週間程度漬け込み(蛹は死ぬ)、その後塩を取り除き乾燥

させて保存します。この糸は僅かにあめ色がかって白く、艶がありふんわりとした感触で、染まりも良く均一です。

京都工芸繊維大学で日本野蚕学会が開かれた時、塩蔵された織度偏差の大きな繭から揚げた糸で染織された、だらりの帯の展示をみて、その艶やかさに感動しました。その帰路工房に立ち寄ってその秘密を聞く事が出来ました。なんとそれは一口に塩と言っても、ヒマラヤのピンクの岩塩を使っていた物よりお座敷のやや赤みを帯びた間接照明に艶やかでふっくらと若々しく見えるのだと教えられました。この技法は能衣装にも使われ、ゆらめく篝火に照らされるほんの僅かな仕草の表現が、見る人を堪能させるといいます。

京都の西陣に「塩野屋」というお召し屋さんがありました。応仁の乱後14代目で廃業してしまいましたが、おそらく起業当時は塩蔵の糸を取り扱ったのではないかと、14代目に聞いてみました。本人も屋号の由来はよく知りませんでした。

応仁の乱後は出雲の阿国などが派手な衣装で諸国を回る歌舞伎などが流行し、諸侯に招かれ篝火の元で演じる効果ねらった需要があったと思われる。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2021年9月3日

3S 水分補給

すごしやすい日々になってくると反面

日の出が遅くなり 日没が早くなります

お天道様の出ている時間が減るのは

少し寂しい気持ちになります

寝やすい反面

睡眠時に身体が冷える傾向にあります

顎（あご）のずれや痛み

口の中の痛み

目が見えにくくなる

首や背中のスジの痛み

口の中を噛む

頭痛

むくみ

などの症状が出やすくなってきました

暑い時は比較的水分を取りやすのですが小便の量が減る

気温が低くなると水分を取りにくく小便の量が増える

これは汗の問題です

前回のひとり言に書いたことを念頭に

水分補給も温かい物を取るようになっています

体重の30分の1の量を目安に

体内の不必要な物などをデトックスする為に

小便の色や匂いなどで体内の状態や

体調を確認する為に

小便の回数が1日8回を超える水分量をとりました

今日も笑いながら行きます

2021年8月30日

3S 睡眠

蝉の鳴き声が少なくなり秋の虫が鳴き始めました
朝方窓から入ってくる風も涼しくなりすっかり秋らしく
なってきましたね

まだ蒸し暑いですが昨年より熱帯夜という感じが少
ない様に感じます

8月も今日で30日

季節の移り変わりの速さに毎度ながらもビックリします
今回は3S の睡眠です

3S の中でもとても重要で私自身 何よりも1番の
健康法だと思っています

睡眠ですが睡眠時間の長さより入眠時間が何時かとい
うことが何よりも重要です

24時〜4時までには身体にとってお金では買えないほど
の重要で貴重なものが体内に分泌され環流します

それにより身体を修復したり精神を安定させたりします
ということとは今日の頑張った身体を治し翌日良い状態
で1日が過ごせるように準備をするということです

それが24時を過ぎてから寝てしまつと身体や精神の準
備と修復が間に合いません

その修復が間に合わないのを持ち越してしますと
それが積み重なると・・・

大きな症状につながっていく事になるのです

23時までに入眠することが良いのですがそれまでにスマ
ホやテレビやパソコンなどの電子機器を見ないようにし
スツと眠りにつける様にして寝る前の2時間前は極力水
分量を減らし朝まで尿意で起きないようになししょう
起床時

スツと起きて調子いいなと思う時間に起きまししょう
それが身体にあった睡眠時間であり起床時間です
今日も笑いながら行きまししょう

「江上浩二の独り言」 46 江上浩二

評価の基軸

人は何かを実体験して、良かった、悪かったという。その時の良し悪しの指標、基軸は何であるのかという事を、最近考えさせられた。

一つの面は、数値でもってデジタル的にその大小で評価すること。それに対し、アナログ的に数字ではなく、人の直観と言うか、感性と言うか、その感動の大きさ（もはやデジタルとは言えない世界）で、良かった、悪かったとする場合がある。

もう一つの面は、アナログ的にしても、デジタル的にしても、評価する、評価される時間軸が存在することだ。企業の経営実績を数値的に見る時、1年間の売り上げと利益でその経営者の良し悪しを判断する基軸と、いや3ー5年という少し長い期間でその経営者の実力（能力ではない）を評価する基軸もある。

評価の時間軸にはもっと極端なケースが多々あることは皆さんお分かりのことと思う。そのいい例は、ノーベ

ル賞。未だ公開されないノーベル賞委員会なるものがある。ある研究者が大発見した30ー40年前もの研究成果を、今になってそれなりの多大な社会的、経済的貢献があったとして表す。先日の世界体操の内村選手は個人総合で2回連続して金メダルを取った。御歳はまだ、21歳である。さて、体操の評価の基軸を考えると、一応デジタル的なポイントが加算され、その大小で優劣が示されるが、演技そのものはアナログ的で鉄棒や吊り輪、あん馬などはTVを見ても凄かった。今朝のニュースでも昨日10月23日の日本音楽コンクールのバイオリン部門でなみいる大学生、高校生をさしおいて、公立の男子中学3年生が第1位に輝いた事が載っていた。体操にしてもバイオリンにしても比較的短い〃分という〃演技時間で決まってしまう。

それにしても、ノーベル賞を受賞する研究者が少なくとも30ー40歳台で研究成果を出すまでの〃長い時間〃に對して、15歳、21歳のアスリート、アーティストがコンクールで金メダルを受賞するまでの時間は短いと言えるだろうか。3歳から始めた運動の練習や芸術的な習い事が一応世間の目に触れるまでの時間をみると、意外と10ー15年はかかっている。30歳の研究者が大学の研究室で15年

も研究しただろうか。それはどうみても否で、長くて8年程度であろう。年若いアスリート、アーチストさんもかなりの年数を費やし、技を磨いているのだ。

さて、ノーベル賞は最近では社会的、経済的貢献度で左右されているそうであるが、その若いアスリート、アーチストさんがコンクールや試合でトップの座を占めてから、恐らく運動などでは生涯現役でいることはありえず、その後の30-40年間でどういう生き方をして、どんな評価がされるのであるうか。アーチストさんなら、演奏会や指導者として個人的収入にすぐ繋がるのだろうかとか、余計な心配をしてしまう。トップの座を占めたアスリート、アーチストさんに、その後の社会的、経済的貢献度はいかばかりであるかを求めることが、果してまた余計なお世話になってしまうのか、迷ってしまいそうである。

評価の基軸、プリンシプルは私を含めて檜舞台に立てない多くの人にとっては、自分の内なる指標で十分であって、恐らくデジタル的ではなく、感性的な満足度や達成感を率直に受容出来る事と想っている。その自らのプリンシプルは他人に押し付けても、他人へは入り込めず、自らのプリンシプルであり続けるようなもので、

不特定第三者を巻き込むような画一的なものでもない。「今朝」薄暗い5時40分過ぎにちよつとした朝焼けを見て、こんな転末になってしまった。

後記（令和3年8月17日）…「今朝」とは約11年前の2010年秋10月24日のことで、何だか少し感動的になって記した原稿がマイブログに残っていた。振り返ると自分の基軸も使っている語彙をみればばれてしまうが、白洲次郎が好きで読んだ書物の中からのプリンシプルだし、ノーベル賞の評価基準も曖昧と思われるが、推薦委員は秘守義務上50年後に開示しても良いらしく、日本国籍を得て昇天された故ドナルド・キーン氏が日本の著名な小説家の推薦をしたが、だめで、その後初めて川端康成氏が選出された経緯なども、生前話されていた。また、コメントを頂いた知人は基軸は価値観、価値観は理解、理解はその人の生き様・体験で構成され、それも更に喜怒哀楽のような感情が原点にあるのではないかという。

漢詩研修 (六十)

千代田岳精会 平井茂行

雑詩

人生根蒂無し

分散して風も逐えて転ず

地に落ちて兄弟と為る

陶潜

飄として陌上の塵の如し

此れ己に常身に非ず

何ぞ必ずしも骨肉の親のみならん

欲かん得えてはま当じやうにた樂たのしむをし作しますべし

斗と酒しゆ比ひ隣りんをあ聚つます

盛せい年ねん重かさねて来きらず

一いち日じつ再ふたびあ晨したなりが難たし

時ときにお及よぶま当まにべん勉れい勵しますべし

歳さい月げつはひと人を待またず

《語釈》 ※根帯：根底と同義です。帯は花や果実のつく「へた」ですが、この場合は根もとの意です。 ※飄：風に吹かれて動く状態。 ※陌上：路上の意。 ※常身：永遠に変化のない身体。 ※落地：この世に生まれおちること。 ※斗酒：斗とは、もと酒をくむ器の名。斗酒で、大盃になみなみについだ酒。多量の酒の意。 ※比隣：隣近所の人びと、また家々。 ※盛年：二十から三十迄のさかんな年頃。 ※不重来：二度とは来ない。強い否定。 ※及時：よい機会をのがさずに。 ※充実した時を過ごすようにつとめ励む。

《通釈》 人の一生はしつかりとつなぎまとめておく根もともない。それはちようど風に吹かれて飛び散る路上の塵のよくなものだ。風のまにまに吹き飛ばされ、ころがりゆくこの身体は、もとより一定不変のものではない。この世に生まれおちれば、われわれ人間はだれもが兄弟のよくなものだ。よい機会をのがさずに、充実した時を過ごすようにつとめ励むべきだ。歳月はどんどん流れ去り、人を待つてはくれないのだから。

『忘れてはならない日』

中屋保之

いつだったか、まだ妻が健在の頃、私たちが住まいする池袋にある東京芸術劇場の裏口から、当時の天皇・皇后（現上皇ご夫妻）が帰路に就かれるところに遭遇したことがある。妻も私も、ガチガチの保守体質ではなかったが、お二人のお姿に自然と頭が下がり、崇高な気分に入った。何故だろう。多分、家庭を含む教育環境が知らず知らずにならせたのか、日本人という「DNA」が作用したのか。断っておくが、妻も私も、右翼思想の皇室崇拝者では決してない。

『八月や六日九日十五日』という句の意味を理解できない人が増えていることに、「日本の一番長い日」など昭和史について多くの著書を残し、今年一月に亡くなった半藤一利さんが危惧されていたそうである。言わずもがなであるが、「八月六日」は広島に、「九日」は長崎に原爆が投下された日、「十五日」は終戦の詔勅が国民に伝えられた日である。私たちは、親や親戚など近い人にも多くの戦争体験者があり、彼らからその悲惨さを伝えられた世代でもある。

『朕深く世界の大大勢と帝国の現状とに鑑み……』から始まる詔勅の中ほどに『帝国臣民にして戦陣に死し職域に殉し非命に倒れたる者及び其の遺族に想いを致せば五内為に裂く』とある。半藤氏は、八月中の毎朝に、この詔勅を暗唱することを自身に課していたそうである。

私の父も戦争中は一兵士として、満州、沖縄、台湾と転戦したのち幸いにも生還出来た。父は、戦争中のことは殆ど話したがらなかったが、私が中学生になる頃までは、靖国神社で春と秋に行われる大祭には必ず連れて行かれた。提灯の明かりと屋台の喧噪の中、父は黙々と歩み祭壇の前で頭を下げていたのを覚えている。その姿に、戦争での

深い悲しみ、青春を戦火の下で過ごさねばならなかった無念さを想っていたのでは、との思いは今でもある。あるいは、一緒に帰国できなかった戦友たちへの鎮魂であつたらうか。父の兄弟の何人かは、ここに祭られている。ついでに言うと、何かを買ってもらつた記憶は、無い！。

純粹に神前に額づく庶民には、靖国神社の成り立ちや歴史は取るに足らない些事だと思ふ。これは、私の個人的な思いである。それよりも、半藤氏が危機感を持った『八月や六日九日十五日』への認識の低下が気になる。戦後七十六年、国民の大半が戦争体験者ではなくなつたとはいえ、そこまでの忘却、いや知識の喪失が広がつていゝとすれば、この国の記憶の継承と教育に重大な欠陥があると言わざるを得ない。との記事は、最近の劣化したジャーナリズムの中にあつて、秀逸だと思ふ。つまりは、私（たち）が、親から伝えてもらつてゐるはずの大切な、忘れてはならない事柄を確りとした形で次の世代へ伝えることを疎かにした私たち世代への警鐘ともいえるのではないか。

今から十五年ほど前に友人たちと広島を訪れた時、中の一人が酩酊状態で平和記念公園に足を入れた途端、ガイド役の女性からきつくお叱りを受けた。広島の人たちにとって、軽々しくこの場所を扱つてほしくない、とのことであつたらう。まつたくその通りで、その後、彼は酒を断つた。恐らくその後の彼の生き様は、次代への伝え手となつたのではないだろうか。

今年も全国戦没者追悼式が八月十五日に日本武道館で開催された。天皇陛下下のお言葉の中に『私たちは今、新型コロナウイルス感染症の厳しい感染状況による新たな試練に直面していますが、私たち皆がなお一層心を一つにし、力を合わせて困難を乗り越え、今後とも、人々の幸せと平和を希求し続けていくことを心から願います』とある。コロナ禍は今でも試行錯誤の連続である。この経緯を、後世において忘れてはならない事象として残しておかねばなるまい。

秋思しゅうし

桜台楼主人・精真

小斎しょうさい独ひとり酌くんで 幽愁ゆうしゅうをはらひ

月影げつえい清風せいふう 白頭はくとうにたい対す

筑紫ちくしは何れいずの辺へんと 微醉びすいにまかせば

忽たちまち恩愛おんあいをおも懐うて 自おのずから悲秋ひしゅう

秋思

(平成二十九年十月)

小斎しょうさい獨ひと酌く拂はら幽愁ゆうしゅう 月影げつえい清風せいふう對たい白頭はくとう
筑紫ちくし何邊いず任まか微醉びすい 忽たちま懷おも恩愛おんあい自おの悲秋ひしゅう

(通釈) 吾が桜台楼で憂いを払おうと独り酒を飲む。月と清々しい風とが相手である。先生のお墓のある築紫野ほどの辺りかとはる酔い気分で見やれば、忽ち、先生から受けた恩愛を思うて、どう仕様もない悲しい思いの秋となつてしまつた。

※今年八月三十日、弊会の師範研修会を行いました。その中に朱實(瞿麦)氏の俳句「あめつちの今滔滔と春大河」を吟じました。吟と共に作者にまつわる話をしました。

私の中学の担任(目から星が出るほど職員室で殴られた。のんべいで、だけど学校で一番人気があつた)が中国復旦大学で親交を結んだ朱實先生と中国旅行をし、紀行文を書き、いきなり六十冊を送られてきた。一方、我が義父であり弊流の初代宗家は笹川良一氏一行の旅行に加わり、気持ちよく土産話をした。天安門事件勃発の翌日だった。「中国は凄いぞ、上海の最後のパーティで右隣に座つたのが女性の副市長で、実に堂々と挨拶した。左隣が何と日本人より日本に詳しく、俳句をものす…」と話し出したので、席を外し、未だ開封してもない段ボールを開き、一冊を取り出しページをめくり、ああ是れだなと開いて写真を見せた。昨夜の話をしている義父が心底ビックリした。「何で君が知っているのだー」担任やクラスメイトから朱實氏の話は聞いていたのである。すぐに「事実は小説より奇なり」と手紙を書き私の家で私の同窓会と義父との知遇を温める会を開こうと提案した。すぐに機会は訪れた。担任は機会を大事にしたのか慎重しやかだったが、朱實さんの度外れた酒量に皆が驚いた。

そんな話をするに「宗家はご縁に恵まれて」と話題になった。考えてみると誠にそうである。そのご縁の諸々が吟のお陰であり、全てが北九州の恩師から始まつている。

微笑菩薩

今泉由利

前途ぜんと

法悦ほうえつ

鬪芳の姿とうほうのすがた

悠久ゆうきゆう

懷抱かいほう

肝胆披かんだんひらく

清境せいぎやう

幽情ゆうじやう

先拜仏せんぱいぶつ

笑和しょうわ

心受しんじゆ

在天涯ざいてんがい

前途法悦鬪芳姿

悠久懷抱肝胆披

清境幽情先拜仏

笑和心受在天涯

未来への法悦は闘わないこと

思い続けることは、互に深く知り合うことであり

心に止めまらず仏様にお参りをする

心に微笑^{ほほえみ}をもち、天涯にありたいものだ

旅人芭蕉(6)

夏 目 勝 弘

芭蕉の吉野の思いのつに。西行の無為自然の理想郷を求め、奥吉野の地に庵を結んだ。

そして桜の花の咲くのを見、散るのを見て、無為無作こそ真如の悟りと気づく。

○夏ぐさの二葉にすぎる白露も花の上にはたまらざりけり

この一首の「残留思念」に強い思いがあり、吉野行きとなったと思う。三河アララギの発行所がまた、愛知の御津のお馬にあつたとき、編集部員の数名で、万葉の地を巡ったことがある。

この時は芭蕉のことは目的ではなく万葉集の地として行った。とくに吉野山での私の一番の感動は

6924み吉野の象山やまねのまの木末きよまにはこども騒ぐ鳥の声かも

山部赤人

夜明前にまだ同行の人々が眠っている時間一人谷間へと下り行った。すると所で鳥が鳴き始めた。すると波が押し寄せるごとく、次から次へと鳴き声が広がり、谷をかけ上がり全山に鳥の声が広がり、万葉集の(こども騒ぐ鳥の声かも)この単純なありのままの語句が強烈に、今も脳裏に焼きついている。

もちろん奥吉野の西行庵へも立ち寄り、庵というものが、必要最小限の空間のみであることに思いをめぐらした。

多くの僧や俳人等も庵に、一人己れの心と向きあつている。西行が「無為無作」こそが真如と悟つたのもこの庵であろう。

己の心と向きあるには、こうした庵が必要であると、つくづく思う。

芭蕉も老木の花藻幾百年の間に咲き散り、散つては咲いてきた

ことを思いつく一句。

○命二ツの中に生きたる桜哉 と詠む

この桜は二つの運命を共有した二つの生命、自分と前身(芭蕉は西行の生まれ変はりであると信じている)西行の歌の道の苦難を示す象徴でもある。

高野山とは、標高八百米東西六キロ南北三キロ、八つの峰々が蓮の花弁に例えられている。針葉樹林(コウヤマキ)のなかに寺院が二七そして奥の院がある。

供華はコウヤマキ、そのコウヤマキの供華を専門に作る職人をテレビで見たことがある。

紀行文の高野詣のなかに(御庵を心しづかにをがみ、骨堂のあたりに行て、侍おもふあり。此處はおほくの人のかたみの集れる所にして、わが先祖の鬢髪をはじめ、したしきなつかしきかざりの白骨も此内にこそおもひこめつれと、袂もせきあへず、そらろにこぼる、涙をとめて、

○父母のしきりに恋し雉の声 芭蕉

この句は、行基菩薩が詠んだ(山鳥のほろくと鳴く声きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ)と心に深くうけとめながら下山した。

芭蕉の高野山への目的は、奥之院への参拜であろう。

奥之院までは一の橋から御廟までは一キロ余り。一の橋を渡り始めてあるのが、関東大震災物故者の慰霊碑、御廟橋を渡つた最後は左に陸奥宗光墓、右に春日局墓、を含めて三十余りの、だれもの知つている歴史上の人物の墓がある。

今は歩くこと少なく観光のために高野山に行く、だが芭蕉は、弘法大師へ信仰心と、父母への思いを、一歩一歩の歩みに込めて長い万霊の鎮もる、奥之院参道に歩みを進める。

「氷魚」のことから (249) 岡本八千代

美しい日本の国、小さい島国。ここにも襲ったコロナの禍わざや——。その中で遂げたオリンピック。今またパラリンピックのまつさい中。世界の人々の集いの中の日本。この事もおそらくやり遂げられると信じている。

おそらく乗りきることが出来ると信じているこの頃の私にして…。

しかし、思うことは何という運命なのか。国の運命は私たち国民の運命か。今は、毎日をはらはら心配している運命よ。コロナ禍よ何とか助けてくれよ。治まってくれよ。祈るばかりの心が続く。…。

私の心情を告白しつつもここよりは茂吉のことを書かねばなるまい。

茂吉の実相観入論について書いてみたい。茂吉は、正岡子規を尊敬し、子規の「写生」論は「写実」と同義に用いて、作句の基本としながら、なおそのような客観主義では不十分であると批判もしていたのだった。茂吉は客観のみではなく、主観をそこに入れなければ写生はできないものという思考を夢中になって考えていたのだった。

この論文で最もよく知られていることは、「実相に観入して自然・自己一元の生を写す。短歌上の写生である」ところが、その相手になっている「実相」というのを茂吉はドイツ

語の「das Reale」、現実的なものというものに相当する言葉として、つまり、現実のある状態というものは、自然という和辻哲郎の言う自然ということばに近い。今後この自然というものは人生と対立するものだ。精神・文化というものに対立したある意味の哲学的なものを自然という。そして、自然の中には生命が入っている。生命はなかなか言葉として表現しにくいものを短歌の世界で表現しようとするところに観入の「人」という言葉の方向性がある。「実相に観入」というのは、茂吉によれば「写生」ということばに言い換えられるわけですが。「実相観入」即ち写生は単に対象を客観的に写し取るだけではない。対象の本質をほりだしていこうという主観的な態度・姿勢を必要とする。そこに想像力を働かせて、その対象の真実の姿を出すというようなことだろうか。つまり、現実的リアリズムの神髄をさしている言葉である。

写生というのは見たものを見たまま書くのではない。子規は平凡な写生の歌のようだが、対象の本質をえぐり出しているか、を知らなければなるまい。と思うのである。

茂吉の実相観入論、精神科医としての活躍その両立に彼の生き方のすさまじさを私は感じ入ったのである。

やっぱりアララギ派の大歌人として、また心のこもった精神科医としての両立のできる人であったことにたゞたゞ尊敬するばかりである。あのわがままな知的な奥さまの輝子さんの茂吉から離れなかったことの意味がわかったような気がする私。アララギ派の歌の勉強も残り少なくなりつつある私よ。

なほ遠く 2001年5月 今泉由利

ちぎれ雲はつかちぎるる所よりいま飛び立ちし日本を覗く

日本をしばらく留守にする朝餉庭のつくしを卵にとじて

ミシガンの湖は厚き雲の下汀は固く凍りてをらむ

マイアミの海風に乾く一夜干かますに似たりかますの味す

アーミーの双眼鏡をズームアップ灰色ペリカン嘴でかし

透き徹るコンソメスープのひと匙をいま赤道を越えゆくところ

住人でありし時には吹かざりき旅人としてケーナを求む

地球なる半周よりのなほ遠くひたすら遠く遠くを求め

順応をしてゐるでなしあきらめの時過ぎをりぬ地球上空

南極に近きパンパに影動くはぐれ小雲とわが小型機と

はるばると来し地は果つるパタゴニア太古の続く続きの中へ

太古と今と 2001年6月

天空は星残りつつ地平線に朝ちかずけるあかりひろがる
小さな望みのままにはるばるとはるばる来たり地の果つるまで

地球なる生い立ちの見ゆ垣間見ゆパタゴニアの鋭き山に
太古より氷河でありしことの終はる今崩れ落つ真白氷塊
スケッチをする手も心も逸りゐる氷河に移るふ刻々の色
巨大なる氷柱群にま近くて太古と今と白と空色

鋭きにとがれる山々稜線はやがてひとつの線と暮れゆく
パタゴニアの氷河を囲む稜線はひとつの面となりぬ闇
夜の闇も明けゆく朝の朝焼けも遠き昔のそのまま続き
ぬばたまの闇の彼方にとどろける太古の氷河今崩れ落つ

人工の明かりはなくして深き闇耳傾けて氷河の軋み
ウイスキーグラスにかそか音たつる太古の空気今にとけゆく
体温を伝へあひつつ二人して遠き昔の氷の前に

降る雪と供に凍りし太古の空気今の空気に今紛れゆく

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一四一・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
TEL 〇三・五九二四・二〇六五
ケイタイ 〇九〇・八四三四・八六四六
- ◇URL <http://imazumiyuri.jp/>
E-mail yuriiimazumi@jcom.zaq.ne.jp
- ◇編集・発行 今泉由利
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。
編集室までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、
メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、
創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アラ
ラギ」誕生。
- ◇令和三年現在まで一号の欠刊なく、続いてき
ました、続いてゆきます。